

# 同窓会報

発行所 鹿児島県姶良郡加治木町飯塚211  
 県立加治木高等学校同窓会  
 発行人 新納 教義  
 印刷所 徳梅 木印刷  
 姶良郡姶良町三拾町1888



目次

挨拶にかえて	同窓会長 新納 教義	2
会 務 報 告		2
同 窓	同窓会副会長 小里 貞利	3
	高校部会会長 長	3
	創立九十周年の年にあたり、学校長 伊知地 武 十	3
	同窓会総会報告	4
	高校部会総会報告	5
	各支部より	6
	東京種門会・名古屋種門会・福岡種門会	
	宮崎種門会・鹿児島種門会・姶良支部	
	鹿屋支部・三節種門会・南労会	
	同窓会だより	13
	二順会・昭八会・昭中37回・昭中38回	
	昭王会・東京高2回・高3回二六回	
	高7回・高8回・高11回・高26回	
	海外だより	20
種 想	田中38回 村山 喜一	20
清 息		20
創立記念行事案内		21
教育振興会だより	理事長 佐藤 八郎	22
笑いの文化	P.T.A会長 二見 剛史	22
祝劇会	川崎 亮子	23
狂言をみて	鎌波 香奈子	23
学有林作業を体験して		23
卒業生の道路		24

名古屋支部

「名古屋龍門会だより」

名古屋龍門会会長 松崎一郎

第九回目を迎えた名古屋龍門会  
六十二年支部会は七月七日午後二  
時より市西区の「あお木」にて  
開催いたしました。

母校からは新同窓会長と長と伊  
地知校長先生のお三方とこの日の  
午前の航空便にて、ご多忙の中を

ご来会いただきましたこと心から  
厚く御礼を申し上げます。

同窓会員の出席数は六十年度と  
は比較し、千四百名と少ないま  
したが、女性が去年より数減って  
七名おりました。これは少々寂し  
がしなりましたが、ご多忙の中



今まで出席されてい  
た会員の方々は故郷  
へ「リターン」された方  
あり、また転勤で県  
外へ転出された方あり  
りと名古屋龍門会と  
いたしました。では、そ  
の会員数は新卒者の  
増加に期待するしか  
ブラス要因はないよ  
うです。新卒生生の  
皆さん、就緒、就職  
の希望地は甘々と愛  
知、千早であり、大  
阪、神戸方面であり、  
北九州地域が多いよ  
うですが、進学はと  
もかく、就職、大学  
を志すに、関しては  
も少し愛知県外地区  
も考慮されたら如何  
でしょうか。東京、  
大阪方面よりは任ま

いの面において、はるかに良好で  
あり、豊かな自然に恵まれていま  
す。

新同窓会長のお話にありまし  
たように、母校は今年創立九十年  
年の光輝ある歴史を刻むこととな  
りました。多くの卒業生が、集ま  
れ、下さ。栄ある伝統の重み  
をひしと感ずります。今後、私  
どもも努力ながらその伝統を後継  
諸君へ継ぐかものや付加出来  
たいと希求しております。また、  
たいと希求しております。また、  
教育振興会の今後の活動目標につ  
いても詳しくお話を承りました。

努力ながら私どもも出来るかぎり  
努力をして、ご協力をお願いいた  
してまいります。新納先生からは  
さらに、龍見先生からは後援諸  
君の進捗状況、体育関係の活動状  
況等、懐かしき一杯の母校ホット  
ニュースをお知らせいただき、会  
員一同、暫し、母校の学舎や大橋  
の健康を願ひ、中京各大学講師  
南あさ先生に上るストレッチ体  
験を交えて30分進行いたしました  
ですが、宴会は例年の如く賑やか  
に騒ぎました。

同窓会本部におかれましては今  
秋の九十周年行事に向けて御多忙  
の御事と拝察いたします。

会員各位の御健勝と母校の発展  
を祈りつつ、名古屋よりの便りと  
させていただきます。

昭和六十二年三月

「名古屋龍門会だより」付録

西山一郎

(1) 宅名便で届いた同窓会報  
六十二年名古屋龍門会会報を  
二日後に投じたので、かねて高  
校同窓会本部と打ち合わせの通り  
十六日同窓会報が今はやりの宅名  
便で、加治木を発送する旨には小生  
の勤務先まで配達されてきました。

皆様ご承知の通り、全国ネット  
の大学宅配業者の運転手もあがって  
来ました。(9) 龍門の雑誌ビルの一  
フロアに我が社があり、彼は当社  
ペーターの中や、支店でもよく会  
うので顔だけは覚えていました。

いつもは配達物をドヤッと置いて  
受領印を貰うや、「ありがう」と  
一言発して、さっさと帰るこのパ  
ンナム女若者が、今日は違ってい  
ました。発送人の「加治木高等学  
校同窓会」の文字を指し示しながら  
「お宅の会社とこの加治木高校  
とはどういう関係か」といきなり  
刑事のような質問をして来たので  
す。私はいきさつを話してしまし  
た。余計な事なら聞かずに、仕事  
を続けたいのにと思いつつ、ためら  
り帰ればよいのにと思いつつ、たから  
です。しかし、聞かれた以上は出来  
る限り丁寧に答えておきたいと  
考えました。「この会社は加治木  
高校は直接の関係はない。だが、  
この僕が三十五年前に此の加治木

高校を卒業し、今、この地区の同  
窓会の係りをしている。今日、今  
日はその同窓会会報を送って来て  
くれたんだよ」。若者の顔が一瞬に  
ほころび、そして呼びかけた。  
「あっ、僕もこの加治木高校の卒  
業生です」と。「なんだって、  
それでは君は僕の後輩かね」。

聞けば五十二年加高卒、陸上百  
メートル(五)年運動部、除隊して今  
のS&A(愛)へ勤めた後、今、休みは  
月に一日くらいしか取らず、早朝  
から夜おそくまで、体力費本に頑  
張っている彼はまた後身。月給は  
約七十万円、一流企業の課長以上  
の稼ぎをあげているわけだ。先  
と後輩と分けて、お互いにく々  
と笑顔をゆるみみす。「そして  
出身はどこかな?」「(周辺です)  
「なんとな、周辺な、おれも周辺  
ぢゃないが、故郷周辺のすぐ近所  
の知り合いの家のお息子さんでした  
なつかしの同窓会報が昔しくも  
これより今後報の因縁を思い出  
されて来たこの手紙を思い出した  
な。名古屋龍門会の皆さん、どう  
もこの様な後輩の手によって運  
ばれて来た会報です。大事に読ん  
で下さいよ。

「古村君」と彼の名刺をつけ  
た名刺の申請トックは今日も  
当社ビル玄関前に構ってました。  
仕事の都合で名古屋龍門会には

出席出来なかった彼とは、「いっぺん、ゆっくり飲み」と約束しました。しかし、連日多忙の後ゆえに、残念ながらいまだにその約束は果たされておりません。

(2)鹿児島弁の昔など

新納同窓会々々長よりは、さらに敬愛の方官による言葉と心を忘れてないで居て欲しい、それを忘れないことが故郷鹿児島との絆をこれからも保持できることにあるのであります。よし、さらに、私どもの子供達へもその絆は伝承して欲しい、先生のお話がありました。

例えは「泣くか、飛ぶか、」

「泣くか、飛ぶか」の言葉、私達の幼少時代の言葉として育ちました。この鹿児島弁の持つ語感とその中味の精神は正しく「鹿児島」のものであり、私どもは忘れようにも忘れられない言葉であります。

我々の子供達にも、こういうものは是非伝えてもらって、「鹿児島」の絆を保って欲しい、との新納先生のお話でありました。先生の挨拶を承わり、私が直に思い出したのもう一つの言葉が「神さあ神さあ貴かぶらんごつ、」

「あららばあひんごつ、」

「い」とよく併用して唱え、今は昔と取りまらした村の小川の清流に岸の上から小滝のたよりを流れて、どばんと飛びこんだ鹿児島のはる真夏の日々の思い出です。

新納先生が心配されますような鹿児島弁の言葉と心の喪失はたと

鹿児島県外に何年おらうとも、決して私達の顔の中から消失することは無いでしょう。それは正に県外に出て、何年もいづれは標準語を話していても、どうしても宿命的に標準語のアタマをマスタ出来なないことと表裏をなすものでないかと思つて。

しかし、これがどれ程自分の子供達まで伝わっているかと知りたくて、全く自信がありませんでした。家庭の事情で、小学上級から中学一年二学期まで鹿児島市の住宅へ三年近く留守するという体験をして昨年々帰郷して来た娘は、はんな三年間とは云え、それなりに鹿児島弁とその心をいづらかは理解して帰つて来たのではないかと見ています。その娘が今、なつかしさをこめて口にする鹿児島弁の中に「うんだもしたん」と「うんにゃあ」の二語もありました。

娘の口から聞いてみようと、そのまろやかな言葉の響きに驚くのでした。鹿児島弁もこんなに美しく韻律を持っていたのかと、「うんだもしたん」と発音すると、こんなで、フランス語のその言葉と似た語感ではないかと、その言葉の響きだけでわからない、その方言の中にこめられている人々のデリケートな情緒表現を、娘が自分でくれたらと思つて。暫く日常生活で使つたことが無く、あやうく忘れかたよとして、このころの言葉を復活させて、己の口で反響する時、いと好しくも妙や、田舎の幼少年期が、「鹿児島」が眼前に蘇生してくるような気がするのです。

### 福岡支部

## 福岡龍門会だより

### 福岡龍門会事務局

昨年より同窓会設立の準備を重ね、ようやく昭和六十一年六月二十一日(土)設立総会を開くことができました。ところは、中洲、城山ホテル「海の家」。

同窓会案内通知一〇〇枚のうち、五十五名の出席通知をもらひ、福岡在住の同窓生の期待の大きさを実感しました。

当日の出発者は五十四名、案内通知はどこかながったが新聞の集い顔を見て来られたり、他の同窓生から聞いて来られたり、中には同窓会名簿の過去委員会に掲載されている方が来られたり、初回の同窓会とはい名簿の整理の不充分さを感服しました。

四時から設立総会、会の名称を福岡龍門会(藤王会と心う意見もでました。)とし、会員の親睦と母校の発展に寄与することを目的に、会員の資格、役員の見出し(後記)など、原案より承認され、ここに福岡龍門会の発足となつた次第であります。

懇親会に入り、わざわざ本郷より来福された伊地知校長先生の近況報告、新納同窓会長挨拶をい、ただ、いづれも十分位の予定が

聞き入り、三十分オーバーし、事務局は少々気をもち。

総会の後、自己紹介をしながらか所でお酒の、あるいは職場の輪がひろがる。なぜか福岡は土木建築関係者が多く話はずむ。六時、宴は三時前ではありましたが、はや一時間お楽しみしておりますので、最後に壁に掛け、中学、高女、高校の校歌を各グループともに合唱、未練を残して散会しましたが、未だ生ごころの状態の酒豪多く、ホールは満杯、暴力団抗争や、エイズの話題のなかつた。その中のネオン街へ大勢が散っていきました。

博多は、大相撲九州場所がはじまる、フグのおいしい季節となり、街が相撲気分です。そういえば、わい。昭和二十二年卒の井藤方(福岡朝野氏)は、毎年この季節になると博多の住民になられるので、この機会に親方を囲んで同窓会しようとなつた。

福岡の平山氏(朝日タリニック夕院長)に親方との連絡をお願いし、十月二十八日、博多駅前、ホテル・ステーションプラザで第二回の同窓会を開催しました。

出席者は、大正十四年卒の玉利為雄氏(玉利眼科医長)以下四十四名、井藤方から、勝負の世界の興味深い話、若者力士の愛力維持のための苦話話しを聞く。今回はじめての会員も多数出席していただき、親方と記念写真をとつたり、サインをもらつたり話に花が咲きました。なお、この席を借りて、母校九十周年記念行事のための募金をお願いをし、協力を依頼しました。

本会が、会員のために有意義な存在として発展していくためにも、会員名簿の整理や、総会でのユニークな企画など、今後の会の運営に努力していきたいと思つております。

おわりに、発足したばかりの福岡龍門会に対し、同窓会の皆さんにあたたかいご指導、ご支援を切にお願ひいたしました。

役員

- 会長 有島嘉一郎(昭16卒)
- 副会長 橋元 孝夫(昭17卒)
- 幹事 原元 明(一)
- 事務局長 石野 清(昭18卒)
- 竹下 和徳(昭20卒)
- 山口 亨(昭25卒)
- 新川 昭(昭35卒)
- 中村 誠(昭43卒)
- 廣瀬 弘行(昭35卒)
- 廣瀬 義三(昭35卒)
- 会計 廣瀬 義三(昭35卒)
- 会計監査委員 章(昭16卒)
- 前田 辰夫(昭22卒)
- 顧問 玉利 為雄(大14卒)